『精神現象学』「観察する理性」におけるヘーゲルの生命力論[1]

矢端　崇

はじめに

ゲオルグ・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルは『精神現象学』(以下、『現象学』と略称)「理性章」「観察する理性」において同時代の哲学者や自然哲学者の動物的有機体論を批判しつつ、みずからのそれを提示している[2]。その箇所でヘーゲルが批判する当時の動物的有機体論は、環境論、目的論、生命力論、形態学、自然史論である[3]。

これらのなかで、本稿が中心的に論じるヘーゲルの動物的有機体論は、動物的有機体が備えていると当時の自然哲学者がみなした生命力についての議論、つまり生命力論である。生命力は当時の自然哲学者によって数や内容が異なる。「観察する理性」においてヘーゲルが念頭に置いている生命力論は、一般に知られているように、当時の代表的な自然哲学者であるカール・フリードリヒ・フォン・キールマイヤー（Carl Friedrich von Kielmeyer, 1765–1844）[4]と、彼から影響を受けたフリードリヒ・ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・シェリングの生命力論である。ヘーゲルはキールマイヤーが 1793 年に行った有名な講演『様々な有機組織の系列における有機的諸力相互の比、この比の法則と帰結について』と、それに影響を受けたシェリングの『宇宙霊について』と『自然哲学体系の第一草案』とを「観察する理性」において再構成し、批判している（cf. GW9, 500–1）。ヘーゲルが再構成するキールマイヤーとシェリングの理論によれば、生命力ないし有機的諸力には、「感受性 Sensibilität」・「反応性 Irritabilität」・「再生 Reproduktion」という 3 つの力があり、これらの力は相互に関連づけられ法則化される[5]。たとえば、感受性が強くなるにつれて、反応性は弱まるといった感受性と反応性との反比例関係の法則はその一例である。

---

[1] 本稿は 2023 年度に提出された修士論文をもとにしたものである。

[2] ヘーゲルの当時の自然哲学における論争への関わりについて、2 つの対立した見解があるように思われる。チンツィア・フェリーニは、ヘーゲルは積極的に論争に参戦したと述べている（Ferrini 2009, 93）。これに対して、アンドレア・ガンバロットは、ヘーゲルは積極的に参戦はせず、その論争に対して外的な観察者の態度を取っていたと述べている（Gambarotto 2018, 115）。ヘーゲルが当時の自然哲学の発展においてどのような役割を果たしていたのか（もしくは、いなかったのか）は興味深い問題であるが、本稿の研究の対象外であるため、本稿では論じない。

[3] 「観察する理性」においてヘーゲルが批判している当時の哲学者や自然哲学者について論じている文献として渡辺（1969）と Ferrini（2009）が挙げられる。イェーナ期におけるヘーゲルの有機体論と当時の自然哲学の諸理論との連関については Breidbach（1998）が詳しい。ただし、その論文の中で扱われているヘーゲルの有機体論は『イェーナ体系構想』におけるそれのみで、『現象学』におけるそれは論じられていない。

[4] キールマイヤーの基本的な情報については Kanz（2021）とこの論文が収録されている論文集を参照。

[5] 以下で用いる感受性・反応性・再生はすべて生命力としてのそれであり、それ以外の意味では用いない。

こうしたキールマイヤーとシェリングの法則に対して、彼らの生命力論は「論理的本性 die logische Natur」（GW9, 153）を欠いているがゆえに誤っているとヘーゲルは批判する。この批判からヘーゲルの生命力論では生命力が論理的本性に基づいた関係であることが推測される。しかし、ヘーゲルはこの関係がどのようなものであるのかを明確に述べていない。

そこで本稿の問いは次のように定式化される。すなわち、感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係とはいかなるものであるか[6]。この問いに答えることによって、我々は「観察する理性」におけるヘーゲルの生命力論を理解することができる。加えて、この問いの解明をとおして、本稿は、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判する理由について明らかにすることと、「観察する理性」でさまざまな主題において展開される動物的有機体論（環境論、目的論、生命力論）は統合して読まれねばならない必要性を提示することも試みる[7]。

この問いに対する本稿の主張をあらかじめ提示すると以下のとおりである。本稿の主張は次の 2 段階から構成される。すなわち、感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係とは、(1) 感受性・反応性・再生の各々が相互に各々を各自において備えているという関係のことである[8]。そして、(2) その関係には、自己の再生を目的とす

実際にはキールマイヤーは上記 3 つの生命力に「分泌力 Sekretionskraft」と「推進力 Propulsionskraft」の 2 つを加えた 5 つの生命力を提示している（Kielmeyer 1793, 9–10）。

[6] この問題設定はすでに板井孝一郎が提示している。ただし、板井は同論文では問いの提示にとどまり、この問いに答えることを「他日に期したい」と述べている。しかし、そう述べつつも、板井はこの問いに対して一定の方向性を示している。その方向性とは、再生において感受性・反応性・再生の「論理形式」が完成すると考えるものである（板井 1998, 87–9）。板井は「論理形式」という概念を定義なしに導入するため、その真意は不明であるが、おそらく、『大論理学』などで感受性・反応性・再生が前から順に普遍性・特殊性・個別性に対応づけられているため、このことを念頭にその概念を導入したと思われる。しかし、『現象学』ではそうした対応づけが『大論理学』などの著作ほど明確になされていない。したがって、本稿ではテキストを内在的に解釈するために、この対応づけを前提せずに、上記の問いに答えることを試みる。他の著作におけるこの対応づけについては Ferrini（2009, 124 n71）を参照。

[7] 「観察する理性」の動物的有機体論が論じられている箇所では、その他に形態学と自然史論が批判されているが、これら 2 つの理論はそれぞれ独立に批判されている。注 21 で、形態学に対するヘーゲルの批判を簡単に論じている。自然史論に関しては、ヘーゲルは「しかし有機的自然はいかなる歴史ももたない」（GW9, 165）と述べ、自然の歴史性を否定している。原崎道彦によれば、ヘーゲルは 1805 年では自然に歴史を、条件付きではあるが、認めていた（原崎 1994, 115ff.）。この自然の非歴史性は、松山壽一によれば、自然の偶然性、言い換えれば「自然の無力 die Ohnmacht der Natur」（GW20, §250）と関係している（松山 1997, 166）。ディーター・ヘンリッヒは『現象学』においてはじめてヘーゲルの偶然性概念が現れ出ると述べているが、おそらくこの箇所を指してそう述べているのだろう（Henrich 2010, 162）。

[8] (1) の主張自体は新しいものではない。この考えはヘーゲル哲学に一般的なものである。(1) の主張に関して、本稿が先行研究と異なるのは、キールマイヤーとシェリングの法則がヘーゲルにとって不適切である理由を示すことによって、ヘーゲルがどのような根拠に基づいて自分の立場を提示しているのかを従来よりも明瞭にしている点である。ヘーゲルによるキールマイヤーとシェリングの法則に対する批判を扱っている文献として、Berger（2021）、Gambarotto（2018, 120ff.）、板井（1998, 87）が挙げられる。これらの先行研究はキールマイヤーとシェリングの法則に対するヘーゲルの批判点、つまりキールマイヤーとシェリングの法

る実在的な目的が貫いており、この目的抜きには（1）の関係性は成立しない[9]。これが本稿の主張である。

上記の主張を論証するために、本稿は次の順序で論述を展開する。まず、1 章では本稿の問いに取り組むために必要な議論の前提を確認する。具体的には、研究箇所の特定、解釈方法の提示、ヘーゲルの動物的有機体の構造の整理を行う。つづく 2 章では、ヘーゲルの批判相手であるキールマイヤーとシェリングの法則をヘーゲルの叙述から再構成し、3 章でこの法則に対するヘーゲルの批判を分析する。その分析の結果として、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判する理由などが明らかになることに加えて、ヘーゲルの必然性概念も明らかになる。最後に、4 章では、この必然性概念に基づいて、ヘーゲルの生命力の論理的本性に基づく関係を明らかにし、この関係の成立には実在的な目的が必要不可欠であることを示す[10]。

1 議論の前提

則では生命力が量において捉えられるため、彼らの法則では生命力が相互に有機的な関係を持ちえないというヘーゲルの批判を適切に指摘している。しかし、これらの解釈では、なぜヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則をこのように批判しているのかが明らかではない。本稿はこの点を補うことによって、ヘーゲルがどのような根拠に基づいて自説を提示しているのかを従来よりも明らかにする。

[9] （2）の主張に関しては、従来、ヘーゲル哲学にとって目的論は重要であると指摘されることはしばしばあったが、しかしどのように重要であるのかは判然としていなかった。これに対して、本稿はこの点を明確にした。あらかじめその結論を述べると、目的が実在的でなければ、各々が相互に各々をそれ自身において備えているというヘーゲル特有の「概念」の構造が成立しないがゆえに、ヘーゲル哲学にとって目的論は重要なのである。ウィレム・A・デブリースもまた目的論をヘーゲル特有の「概念」と関連させて論じているが、本稿はヘーゲル特有の「概念」の構造を支える根拠として目的論を論じており、規範としての「概念」との関連で目的論を論じているデブリースとは異なる（deVries 1991, 63–5）。ヘーゲルにとって、「概念」と「生命」は同じ構造をしているとされているため、生命の最も高次の段階である動物的有機体を分析することをとおして、上記のことを明らかにする。ヘーゲルにとって、動物的有機体が生命の最も高次な段階であることについては（GW9, 150）を参照。

本稿では鉤括弧付きの「概念」はすべてヘーゲル特有の「概念」を指し、付いていない概念は一般的な意味での概念を指す。ただし、引用文中の概念はこの限りではない。

[10] 誤解を防ぐために、本稿の注意点を 2 つあらかじめ明確にする。1 点目は、本稿はヘーゲルが論じていることの分析と再構成を意図しており、けっしてヘーゲルの生命力論がキールマイヤーやシェリングの立場よりも優れていることを証明しようとするものではない、ということである。それゆえに、3 章におけるヘーゲルによるキールマイヤーとシェリングに対する批判の再構成は、ヘーゲルの立場を前提としたものであり、それぞれの生命力論を公平に扱うものではない。2 点目は、1 点目と重なるが、以下で登場するヘーゲルと同時代の哲学者や自然哲学者の理論はヘーゲルが解釈したものであり、本稿はヘーゲルが解釈したもののみを扱う、ということである。彼らが実際にどのような考えを持っていたのかについては本稿の研究課題から外れるため、論じない。ガンバロットによれば、19 世紀ドイツの生物学を対象とする歴史研究は近年見直しがなされている。従来はティモシー・ルノワの研究（e.g. Lenoir 1982）がこの分野の古典であったが、近年ルノワの研究は批判を受けている（Gambarotto 2018, xv–xvii）。この分野の最新の文献については Gambarotto and Illetterati（2020, 350）を参照。

本章は 2 章以降で展開される論述に必要ないくつかの前提を説明することを目標とする。その前提は全部で 3 つある。その 3 つとは、研究箇所、解釈方法、動物的有機体の基本構造である。

1.1 研究箇所

第 1 に、本稿が以下の論述で扱う『現象学』の研究箇所をより詳細に特定する。本稿は「観察する理性」を扱うと先に述べたが、同箇所は大別して 3 つの節から構成されており、その下にさらに細かな区分が存在する。本稿が扱う箇所はそのなかのごく一部であるため、その箇所を明示する。「観察する理性」の目次は次のようになっている。

V. 理性の確信と真理
　A. 観察する理性
　　a) 自然の観察〔中略〕
　　有機的なものの観察
　　α) 有機的なものと非有機的なものとの関係
　　β) 目的論
　　γ) 内なるものと外なるもの（以下、α 節、β 節、γ 節と略称）〔後略〕（GW9, 6）[11]

上記のなかで本稿が主に扱うのは「a) 有機的なものの観察」[12]以下であり、そのなかでも、とりわけ、γ 節を扱う。γ 節のなかで、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判しているためである。

1.2 解釈方法

第 2 に、本稿が採用する『現象学』の解釈方法を説明する。まず一般的な解釈方法について述べ、次に本稿が採用する解釈方法を説明する。

『現象学』を解釈する際には、一般的には、その都度の段階の意識の態度を把握することが重視される。周知のとおり、『現象学』は意識が最も未熟な段階から、その都度の段階で明らかになる誤謬を乗り越えていき、最終的に絶対知という最も高次な段階へと発展する過程を論じた特異な形式の哲学書である。この発展過程のその都度の段階で明らかになる誤謬の原因は意識の対象に対する態度に起因する。意識ははじめ誤った考えを正しいと思い込んでいる。これが意識の対象に対する態度である。しか

[11] γ 節の下にはさらに 3 つの区分が設けられているが、あまりにも煩雑になるため省略する。γ 節では、キールマイヤーとシェリングのほかに、ヘンリッヒ・シュテフェンス（Henrich Steffens, 1773–1845）という当時の自然哲学者の理論が批判対象として扱われているが、彼の理論は地質学に関するものであり、本稿の問いとは関係しないため考察対象に含めない。
[12] 本稿では organisch は文脈や品詞に応じて「有機的」、「有機体の」、「有機的なもの」と訳し分ける。

し、次第に、この態度はヘーゲル特有の弁証法によって意識自身に対しても誤りであることが暴かれる。そして、この暴かれたことをきっかけに意識は次の高次の段階へと進む。そのため、『現象学』の解釈においては、その都度の段階の意識の態度を把握することが重視される。

しかし、本稿が研究対象とする「a）有機的なものの観察」以下において、一般的な解釈方法を採用するとあまり有意義な論述を展開できないと思われる。この段階での意識は「観察する意識 das beobachtende Bewußtseyn」と呼ばれている。γ節において、ヘーゲルはこの観察する意識にキールマイヤーとシェリングの法則を述べさせている。そのため、『現象学』の研究者は、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判する理由を観察する意識の対象に対する態度に求めることはやはり重要である、と考えるかもしれない。しかし、ここでの観察する意識の対象に対する態度とは、動物的有機体を「存在」と「持続」との形式において捉えようと試み、動物的有機体の運動を「外なるものは内なるものの表現である」という法則に無理やり当てはめようとする態度である（GW9, 149）[13]。言い換えれば、ここでの観察する意識の態度とは、生命ある動的なものを解剖学のように固定的に捉えようとする態度である。そのため、生命あるものを生命あるものとして捉えようとするヘーゲルの立場からは、観察する意識の態度は乗り越えられるべき段階とみなされる[14]。以上を踏まえて、キールマイヤーとシェリングの法則の誤りを観察する意識の態度に求めると、キールマイヤーとシェリングの法則は動物的有機体を解剖学的に捉えているために批判されるべきだという主張以上に議論を展開することができず、あまり有意義にこの箇所を解釈できなくなる。

むしろ重要であるのは、なぜキールマイヤーとシェリングの法則による動物的有機体の把握の仕方では、動物的有機体を解剖学的に把握することに陥ってしまうのかということを明らかにすることにあると思われる。そのため、本稿では、キールマイヤーとシェリングの法則を、観察する意識の態度に関連づけることなく、そのまま再構成し、その法則のなにが誤りであるのかを明らかにするという方法を採用する。本稿の解釈方針では、キールマイヤーとシェリングの法則が誤っているのは観察する意識

[13] 本稿2章以降で登場する「a)有機的なものの観察」における諸々の法則はすべてここでの法則に変換されて考察されるのが一般的であるが、本稿ではそうしない。というのも、本稿の課題にとっては、そのように考察したとしても、結論やその論証過程は変わらず、むしろ論述が複雑になるだけだからである。

[14] ヘーゲルが観察する意識の態度を詳細に批判しているのは（GW9, 156ff.）においてである。この箇所でヘーゲルは「観察する理性」において意識が「知覚章」や「悟性章」からいかに発展しているかを述べている。この問題は『現象学』に特有の興味深い問題であるが、本稿の関心事ではない。

の態度のゆえにではなく、その法則固有の欠陥のゆえにである[15]。とりわけ、3.2 の論述においてこの解釈方針は重要となる。

1.3 動物的有機体の基本構造

第 3 に、「a）有機的なものの観察」における動物的有機体の構造を整理する。

ヘーゲルの動物的有機体にとって最も重要な定義は「したがって、有機的なものは〔他者への〕関係においてさえも自己を維持する」（GW9, 145）というものである[16]。ヘーゲルが考える動物的有機体とは、このように自己の維持を目的として運動する「自己目的 der Selbstzweck」（GW9, 150）的な存在である。

ヘーゲルによれば、「さて有機体の諸契機自身に関して言えば、それら諸契機は自己目的という概念から直接的に明らかになる」。この諸契機が感受性・反応性・再生であり、上記の引用から明らかなとおり、これら 3 つの生命力は、ヘーゲルの定義から、常に目的との連関においてある（GW9, 150–1）[17]。

以下にこれら 3 つの生命力の内容を整理する。ヘーゲルによれば、感受性は、先の動物的有機体の定義である自己を維持するという「有機体の自己内還帰 die organische Reflexion in sich」を指している。これに対して、反応性は、感受性のように自己内還帰するだけでなく、外界への「現実化」を表現しており、「この現実化においては〔感受性の〕かの抽象的な対自存在は対他存在となっている」。これら 2 つの生命力に対して、「しかし再生は〔感受性と反応性とからなる〕こうした自己内還帰した有機体全体の作用であり、目的自体としての〔中略〕有機体の働きである」[18]。あるいは、次のようにも定義されている。「しかし、再生は本来的には実在的な有機体の概念、あるいは、個体として自分自身の個々の諸部分を生産することによって〔中略〕自己へと還帰する全体である」。つまり、再生は自己を目的として運動する感受性・反応性・再生すべての「有機体全体の作用」であり、かつ「目的自体」であり、個体としては自己の身

[15] この解釈方針はけっして妥当性を欠くものではない。というのも、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判するのはその法則固有の欠陥のゆえにだからである。彼らの法則に固有の欠陥があるがゆえに、ヘーゲルは意識の発展過程の途中段階に彼らの法則を位置付けている。γ 節の意識の態度の誤りは彼らの法則の誤りの表れであり、その逆ではない。

[16] 同様の定義は（GW20, §350）でもなされている。このように、以下では、「観察する理性」と同様のことを述べていると思われる『エンツュクロペディー』「自然哲学」（第 3 版）の箇所を注で示す。ただし、本稿では類似箇所の提示に留め、その類似箇所が同じことを言っているとまでは主張しない。バーガーは、「観察する理性」のうちに、『エンツュクロペディー』で論じられる生命についての理解がすでに示唆されていると述べている（Berger 2021, 209）。

[17] 『現象学』において、生命力は文脈に応じて呼び方が異なる。「概念 der Begriff」との関連においては「諸契機 Momente」が、動物的有機体が備える性質としては「諸特性 Eigenschaften」が、「目的 der Zweck」との関連においては「働き das Thun, die Thätigkeit」が生命力の呼び名として用いられている。以下で用いる上記の術語はすべて上記の意味で用いる。

[18] 類としての動物的有機体論は本稿の議論に関係しないため、類の再生についての引用は省略する。次の引用も同様である。本稿が注力するのは個体としての動物的有機体論であり、類としてのそれではない。

体の諸部分の産出に努めるものである[19]。言い換えれば、再生の定義から明らかなとおり、再生は動物的有機体の最も重要な定義、すなわち「したがって、有機的なものは〔他者への〕関係においてさえも自己を維持する」(GW9, 145) という働き全体であり、感受性と反応性が目指す目的でもある。

これら 3 つの生命力の関係を整理すると次のとおりである。動物的有機体は自己を維持する自己目的的な存在である。この自己目的という概念から感受性・反応性・再生の 3 つが明らかになる。再生は、「目的自体としての有機体の働き」という定義が示すとおり、働きかつ目的である。加えて、再生は、「有機体全体の作用」という定義から、感受性・反応性・再生すべての働きをみずからに含んでおり、動物的有機体の自己維持の働き全体と同等である。したがって、3 つの生命力は自己の維持ないし再生を目的として働いている、全体としては 1 つの働きの 3 つの側面である。以上が 3 つの生命力の関係性である[20]。

以上の 3 つの生命力は動物的有機体の内的側面にあたるが、これに対して外的側面が存在する。この外的側面も 3 つあり、上記 3 つの生命力それぞれに対応している。すなわち、感受性には「神経組織 Nervensystem」が、反応性には「筋組織 Muskelsystem」が、再生には「内蔵 Eingeweide」が対応する (GW9, 151)。以上の内的側面と外的側面とをあわせたものが動物的有機体の全体像である。

2 観察する意識によるキールマイヤーとシェリングの法則

本章は γ 節において観察する意識が立てる法則、すなわち、ヘーゲルが解釈するキールマイヤーとシェリングの法則を整理し、この整理をとおして、本稿 3 章の論述への導入の役割を果たす。3 章で展開される論述とは、ヘーゲルによるキールマイヤーとシェリングの法則に対する批判についての分析である。そのため、ここで、3 章で批判される法則がいかなるものであるのかをまとめる。

感受性・反応性・再生をめぐる γ 節の議論において、観察する意識が立てる法則は 2 つある。その 2 つの法則が述べられている箇所を以下に引用する。

> したがって、そのような法則の表現においては、たとえば、ある一定の感受性は〔本来的には〕有機体全体の契機であるとしても、その表現をある一定の形成された神経組織において持つということになるであろうし、あるいはある一定の感受性は個体の有機的諸部分のある一定の再生や、全体の繁殖にもまた結びつけられるであろうなどということになる。(GW9, 151)

---

[19] 本段落における以上の引用はすべて (GW9, 150–1) からのものである。

[20] 厳密に言えば、3 つの生命力の関係性は以上で整理したものよりも一層複雑であるが、この関係性は崩れない。

この箇所の法則は接続法 II 式、つまり反実仮想で書かれていることから、ヘーゲルにとって実際には存在しない法則であり、観察する意識が正しいと思い込んでいる法則であると言える。明らかなとおり、この箇所で述べられている法則は 2 つあり、金子武蔵はそれを次のように簡潔にまとめている。「感受性-反応性-再生という機能と神経組織-筋組織-内蔵組織という組織との関係を表現した法則と、諸機能ないし諸組織相互の関係を表明した法則がありうるわけである」（金子 1971, 537）。

これら 2 つの法則のうち本稿にとって重要なのは、諸機能相互の関係についての法則であり、この法則もまた 2 種類に区別される[21]。

1 つ目は、感受性と再生との関係の法則である。この法則が意味しているのは、感受性が強ければ強いほど、再生ないし繁殖力は弱まり、感受性が弱まるにつれて、再生は強まるということである。しかし、ヘーゲルはこの法則について少し言及するだけで、次の感受性と反応性の関係ほど議論を展開していないため、これ以降は扱わない[22]。

2 つ目は、感受性と反応性との関係の法則[23]であり、こちらの法則は本稿にとって最も重要なヘーゲルの批判対象である。この法則の内容はヘーゲルによって次のように明瞭に述べられている。すなわち、「たとえば、感受性と反応性とがそれらの量の反比例の関係にあるというような種類の法則が発生する」（GW9, 152）。言い換えれば、感受性が増加するにしたがって、反応性は減少し、感受性が減少するにしたがって、反応性は増加するという法則である。これが感受性と反応性の関係について観察する意

[21] 機能と組織との関係についての法則は、両者の間にいかなる関係も見出されないという単純な理由によってヘーゲルによって否定されている（GW9, 151; cf. Berger 2021, 205–6）。諸組織相互の関係の法則は本稿の課題に関係ないため、論じない。

[22] この法則に対するヘーゲルの批判を簡潔にまとめると次の通りである。すなわち、ヘーゲルによれば、上記の感受性と再生との関係は法則に必要な合理性を持っておらず、それゆえにそもそも法則となることができない。そのため、ヘーゲルにとってこの法則は誤りなのである（GW9, 154; cf. Berger 2021, 207–8）。

[23] 「観察する理性」において観察する意識は動物的有機体を「外なるものは内なるものの表現である」という法則において捉えようとすると先に述べた。機能と組織との関係においては、前者が内なるもので、後者が外なるものであることは明らかだが、諸機能相互の関係においては不明瞭であると思われる。ヘーゲルは「—〔諸機能相互の関係について論じている〕ここでは有機体の概念の諸契機が外面性において考察されているが、この外面性は内なるもの自身の直接的な外面性であり、全体における外なるもの、形態であるところの外なるものではない」（GW9, 154）と述べている。同様のことは別の箇所でも言われている（cf. GW9, 151）。この引用では「内なるもの自身の直接的な外面性」と「全体における外なるもの、形態であるところの外なるもの」とが対比されている。後者は、γ 節の中の「ββ）内なるものと形態としての外なるもの」と題された箇所で、機能と組織との関係の法則が論じられていることから、組織を指していると考えられる（cf. GW9, 154–5.）。これに対して、前者は、注 17 で述べたように諸契機とは生命力ないし機能の別名であり、その諸契機が考察されているところの外面性は前者であると述べられていることから、諸機能相互の関係の一方が外なるものとして扱われていることを指す（cf. 金子 1971, 539）。おそらく、1.3 で整理した生命力の定義から、感受性と再生の関係では再生が、感受性と反応性の関係では反応性が、内なるものである感受性の直接的な外面性において、つまり外なるものとして扱われていると考えられる。

識が立てる法則であり、ヘーゲルが解釈するキールマイヤーとシェリングの法則である。この一方が増加するにしたがって、他方が減少するという法則を以下では「反比例の法則」と呼ぶ。

この反比例の法則は、ヘーゲルによれば、感受性と反応性の「量的 quantitativ」区別に相当するのに対して、ヘーゲル特有の「概念」にしたがってなされる感受性と反応性の区別が存在する。その区別は「質的 qualitativ」区別である。感受性と反応性とは本来的には質的区別でなければならないが、観察する意識には量的区別として現象してしまう（cf. GW9, 152）[24]。このことから感受性・反応性・再生の質的区別とそれらの論理的本性に基づく関係とは同じであると言える。この量的区別に対するヘーゲルの批判を次章で論じ、3 つの生命力の質的区別あるいは論理的本性に基づく関係とはいかなる関係であるのかを 4 章で明らかにする[25]。

3 ヘーゲルによるキールマイヤーとシェリングの法則に対する批判

本章では、キールマイヤーとシェリングの反比例の法則に対して、ヘーゲルがいかなる理由で批判しているのかを分析する。反比例の法則に対するヘーゲルの批判は 2 つある。1 つは、反比例の法則は再生を欠いているというものであり、もう 1 つは反比例の法則は必然性を欠いているというものである。この批判を以下に詳述する。

3.1 キールマイヤーとシェリングの法則は再生を欠いているという批判

1 つ目のヘーゲルの批判は、動物的有機体の働きは感受性・反応性・再生の 3 つであるのにもかかわらず、反比例の法則では対立を基に法則が形成されているため、感受性と反応性のように対立関係にない再生は法則化できないという批判である。ヘーゲルは次のように述べている。

> 最後に、感受性と反応性との代わりに、再生が一方もしくは他方との関係へともたらされるならば、こうした〔反比例の〕法則を定立する動機さえなくなってしまう。というのも、再生は、感受性と反応性とが相互に対立しているように、そ

[24] 観察する意識に対して 3 つの生命力がそのように現象するのは観察する意識の対象に対する態度による、と答えるのが一般的であるが、こうした答えではなぜ観察する意識は対象をそのような態度で観察することに陥ってしまうのかが見過ごされてしまう。先述したとおり、本稿では 1.2 で述べた解釈方法に従い 3.2 の末尾あたりでこのことを明らかにする。また、この区別は（GW20, §359）においても見られ、そこでもヘーゲルは質的区別をみずからの立場としている。

[25] ヘーゲルが「量的」や「質的」で厳密に何を意味しているのかまでは明らかにできない。というのも、「観察する理性」でヘーゲルはそれらの用語を解釈するのに十分な材料を読者に提供していないからである。本稿が明らかにできるのは、2 つの区別にしたがって表されている 3 つの生命力の関係である。ヘーゲルにとっての両者の厳密な意味については彼の論理学を研究する必要があると思われる。

れら諸契機と対立にあるのではないからである。この法則定立は対立に基づいているため、ここでは法則定立の成立の外観でさえなくなってしまう。(GW9, 154)

このヘーゲルの批判は一見すると粗雑で乱暴なものに思える。というのも、キールマイヤーは感受性と再生との関係の法則を論じているからである。加えて、本稿 2 章で見たとおり、ヘーゲル自身がキールマイヤーの感受性と再生との関係の法則に言及しているため、上記の批判は自己矛盾しており、それゆえに粗雑な批判に見える。

しかし、この批判は見かけによらず非常に重要であり、ヘーゲルにはこの批判を述べなければならなかった理由があると考えられる。ヘーゲルはこの批判の意図をまったく述べていないため、以下はこの批判を述べている周辺箇所からの推測となる。本稿 1.3 で確認したとおり、ヘーゲルにとって動物的有機体とは、自己を維持する自己目的的な存在であり、この自己目的という概念から感受性・反応性・再生が明らかにされる。感受性と反応性とは、自己の維持ないし再生を目的として働く有機体の生命力であり、それゆえに再生は感受性と反応性とをみずからのうちに含む「有機体全体の作用」である。言い換えれば、感受性と反応性とは、働きでありかつ目的でもある再生を媒介として「有機体全体の作用」を構成している。このことから次のことが言える。すなわち、再生なしでは感受性と反応性とはいかなる関係も持たない。この動物的有機体の構造が上記の批判との関連で重要なのは、まさに再生なしでは感受性と反応性とはいかなる関係も持たないというこの点である。ヘーゲルはγ節のみずからの動物的有機体観について語っている箇所で次のように述べている。「〔感受性と反応性の〕作用ないし反作用における還帰と還帰における作用ないし反作用とは統一を得てまさに有機的なものを形づくるものであり、そうしてこの統一は有機体の再生と同じことを意味するのである」(GW9, 152)。ヘーゲルの動物的有機体観によれば、再生が感受性と反応性の媒介となって、これら両者を結びつけているため、再生なしでは両者の法則は成立しない。それゆえに、再生をみずからのうちに含むことができない反比例の法則は、ヘーゲルにとって成立しない[26]。このことを 1 つ目の批判は暗に指摘していると考えられる。そして、そのために、1 つ目の批判は重要である。以上の解釈は、ヘーゲルが明確に述べていないため、断定することはできない。しかし、この解釈はこの批判の周辺箇所から十分に言えることであると思われる。

この批判の意義は 4.2 でより一層明らかになるが、ここでその意義について簡潔に述べておくと次のとおりである。すなわち、ヘーゲルの生命力の論理的本性に基づく関係は実在的な目的によって成立させられる。その際に、再生が実在的な目的となって、感受性と反応性を媒介するため、再生はヘーゲルが正しいと考える生命力の関係

[26] 明らかなとおり、この批判はヘーゲルの動物的有機体観とその妥当性が前提された上でなされている。しかし、先述したとおり、本稿はヘーゲルの論述の分析と再構成に焦点があり、この批判が無条件にどの程度妥当であるかといったことは考察対象ではない。

には必要不可欠となる。それゆえに、キールマイヤーとシェリングの法則は再生を含むことができないという上記の批判は重要となる。

3.2 キールマイヤーとシェリングの法則は必然性を欠いているという批判

2 つ目の批判は、反比例の法則を構成する感受性と反応性との間にはいかなる必然性もないことを証明するものである。言い換えれば、反比例の法則は必然性を欠いているがゆえに、法則の名に値しないことを示す批判である。

本節の論述の流れをあらかじめ提示すると次のとおりである。まず、γ節でのキールマイヤーとシェリングの法則には必然性がないというヘーゲルによる批判を、その批判が述べられている箇所が不明瞭で理解し難いため、分析し、その解釈を提示する。次に、この批判が依拠しているヘーゲル特有の「概念」概念がいかなるものであるのかをα節の議論から明らかにし、その「概念」概念を踏まえて上記のキールマイヤーとシェリングの法則に対する批判を解釈し直す。それから、1.2 で示した解釈方針に従って、なぜキールマイヤーとシェリングの法則では生命あるものを生命あるものとして把握できないのかについて論じる。そして最後に、この批判はα節の議論が踏まえられなければ十分に理解できないことを示す。

以上の論述において明らかになることは 4 つある。1 つ目は、γ節でなされている不明瞭なヘーゲルの批判がどのようなものであるかである。2 つ目は、ヘーゲル特有の「概念」概念ないし必然性がどのような構造をしているかである。3 つ目は、なぜ（ヘーゲルが解釈する）キールマイヤーとシェリングの法則では生命あるものを存在と持続の形式において捉えることに陥ってしまうのかである。4 つ目は、この批判を十分に理解するためにはγ節だけでなく、その前で論じられているα節の議論を踏まえなければならないということである。

反比例の法則には必然性が無いという批判は反比例の法則に、例として、「穴の大きさ die Größe des Loches」という一定の内容が与えられることによって遂行される。2 つ目の批判で用いられている例は突飛でパラフレーズによる説明が困難なため、該当箇所を全文引用し、それからその箇所についての本稿の解釈を提示するという形を取る。以下が 2 つ目の批判の該当箇所である。

> —しかし、この法則〔反比例の法則〕にある一定の内容が与えられた場合、たとえば、穴の大きさはその中身をなすものが減少するにしたがって増加するというようなある一定の内容が与えられた場合、この反比例はまったく同様に正比例に転化させられることができ、穴の大きさは取りさられたものの量と正比例して増加すると表現されることもできる。（GW9, 152–3）

ここでのヘーゲルの批判の重要な点を簡潔にまとめると、反比例の法則は正比例の法則としても表現できるため、つまり別の在り方も可能であるため、そこに必然性[27]はないということである。別の在り方も可能であるとは次のようなことを意味している。たとえば、ある出来事 E_1 と別の出来事 E_2 との間に必然性があると言うとき、E_1 が生じたあとにその他の出来事 E_3 や E_4 が生じることは決してありえない。もし E_3 や E_4 が生じたのであれば、E_1 と E_2 の間に必然性はない。この E_3 や E_4 が生じることが、別の在り方も可能であるということで意味していることである。周知のとおり、これは必然性概念の一般的な意味である。このことを踏まえて穴の大きさの例を敷衍すると次のとおりである。一方で、穴の大きさ（E_1）は穴を掘れば掘るほど大きくなる（増加する）が、大きくなるにつれて、穴をもともと占めていたものの量（E_2）は減少する。したがって、この事象は、穴の大きさと穴をもともと占めていたものの量とは反比例の関係にある、と法則化できる。他方で、穴を掘った際に出てくる取りさられたものを一定の場所に蓄積すれば、取りさられたものの嵩（E_3）は大きくなる。この取りさられたものの嵩は穴の大きさが大きくなればなるほど増加するため、穴の大きさと取りさられたものの嵩とは正比例の関係にあると表せる。以上の穴の大きさについての正比例と反比例の 2 つの関係は表現の仕方が異なるけれども、それら 2 つの関係が表している事象は同じである。どちらの関係においても、関係を構成している一方、つまり穴の大きさ（E_1）は変化していないが、もう一方は変化している。もう一方とは、反比例の関係では、穴をもともと占めていたものの量（E_2）であり、正比例の関係では、取りさられたものの嵩（E_3）である。反比例の法則は正比例の法則に転化させられても、表現している事象に変化はないが、転化させられた際に（E_2）が（E_3）に変化しうるということは、（E_1）と（E_2）との間に必然性はないということを示している。このことから、反比例の法則には必然性がないため、反比例の法則は法則の名に値しないことが帰結する。以上がヘーゲルによる反比例の法則に対する批判である。

この穴の大きさの例を用いた反比例の法則に対する批判は、感受性と反応性の反比例の法則にそのまま当てはまる。たとえば、感受性と反応性の反比例の法則を数値化すると次のとおりになる。すなわち、ある点を基点にして、感受性が 3 の値増加するにしたがって、反応性は 3 の値減少すると想定する。これは、一方が増加するにしたがって、他方は減少する、という反比例の法則である。しかし、ヘーゲルによれば、「あるいは、たとえば、3 という数は、私がこれを正と解しようと負と解しようと、同じ大きさのままである。そして、私が 3 を 4 にまで大きくするときには、正は負と同じように 4 になっている」（GW9, 153）。ヘーゲルによれば、正の数の 3 も負の数の

[27] ここでの必然性は、さしあたり、それ以外にはありえないこと、という一般的な意味で用いている。ヘーゲルの必然性概念は本稿が展開するにつれて以下で徐々に詳らかになる。「観察する理性」におけるヘーゲルの必然性概念が本稿で十分に明らかになるのは 4.2 においてである。

3 も絶対値（ゼロからの距離）は 3 であり、同じ大きさである。それゆえに、上記の数値化された感受性と反応性の反比例の法則は、感受性が 3 の値増加するにしたがって､反応性も 3 の値増加するというように正比例の法則としても表せる｡したがって、感受性と反応性との反比例の法則も正比例の法則として別様に表現されうるため、感受性と反応性の反比例の法則はいかなる必然性もなく、法則の名に値しない[28]。

ヘーゲルは別の箇所で、反比例の法則とは別の法則をこれと同様の仕方で批判しており、そこではヘーゲルが正しいと考えている必然性の意味がより明瞭になっているため､その箇所を以下の数段落で分析し､次の 3 つのことを示す｡すなわち､第 1 に、動物的有機体論におけるヘーゲルの必然性概念の基本的な形を提示する。この基本的な形は直前に述べた、反比例の法則とは別の法則に対するヘーゲルの批判を分析することをとおして提示される。その別の法則とは何であるかをあらかじめ述べると、それは「空中に属する動物は鳥の特徴を備えている」（GW9, 145）といったものであり、一般化すれば、環境に応じて動物はそれぞれの特徴を持っているというものである。ヘーゲルはこの法則が誰によるものであるのか明言していないが、先行研究では当時の自然哲学者であるゴットフリート・ラインホルト・トレヴィラーヌス（Gottfried Reinhold Treviranus, 1776–1837）の環境論だと指摘されている（cf. GW9, 500）。この法則に対するヘーゲルの批判が展開されているのは α 節においてである。この法則に対してヘーゲルは次のように批判する。すなわち、この法則は「目的論的関係と呼ばれるところのもの was teleologische Beziehung genannt wird」であるにすぎず､「必然性 die Nothwendigkeit」を欠いているため、法則の名に値しない（GW9, 146）。この批判を以下でさらに詳細に分析することをとおして、動物的有機体論におけるヘーゲルの必然性概念の基本的な形を提示する。

第 2 に、なぜキールマイヤーとシェリングの法則では生命あるものを生命あるものとして把握できないのかについて論じる。言い換えれば、生命あるものがキールマイヤーとシェリングの法則では存在と持続の形式において捉えられてしまう理由を明らかにする。

第 3 に、先の反比例の法則に対する 2 つ目の批判がどのような根拠に基づいてなされているのかを示すことも試みる。この試みによって明らかになることは、この箇所での必然性概念の理解なしに、ヘーゲルによる反比例の法則への批判は十分に理解できないということである[29]。以上の 3 つを α 節の環境論に対するヘーゲルの批判を分析することをとおして示す。

---

[28] ここでのキールマイヤーとシェリングの法則に対するヘーゲルの批判の眼目は、生命あるものを生命あるものとして捉えられないことにある。このことを論じるためにはいくつかの論証が必要であるため、のちに明らかにする。

[29] α 節では環境論が、β 節では目的論が、γ 節では生命力論が論じられている。それぞれの節は異なる主題を扱っているために、従来の研究では各節が別々に論じられている（e.g. Siep

ここで、環境論について論じられているα節でのヘーゲルの論述を整理し、環境論に対するヘーゲルの批判がどこにあるのかを明示する。ヘーゲルがここで批判している環境論とは、環境が動物的有機体に与える影響についての法則であり、α節のタイトル通り「α）有機的なものと非有機的なものとの関係」についての法則である。非有機的なものとは、「空中、水中、大地、地帯、気候」といった動物的有機体が棲息する「普遍的な環境 Element」を指す[30]。環境論では、動物的有機体はこの普遍的な環境から影響を受けており、動物的有機体と環境との間には密接な関係があると想定されるため、「空中に属する動物は鳥類の特徴を備え、水中に属する動物は魚類の特徴を備え、北方の動物は厚い毛皮を持つといった法則」が考えられる。しかし、この法則はヘーゲルによってすぐに否定される。というのも、さまざまな場所でこの法則に合致しない動物が見出されるからである。「〔有機的なものと非有機的なものという法則の〕両側面はこのように相互に自由であるがゆえに、鳥類や魚類などの本質的性格を持つ陸棲動物もまた存在する」。両側面が相互に自由であるとは、両側面の間に厳密な一定の関係が成立しないことを意味している[31]。たとえば、ダチョウは空を飛ぶために必要な翼を備えているが、空を飛ばず、陸上に棲息している。こうした例外は数多く発見されるため、動物的有機体と環境との関係について論じた環境論は必然性を欠いている。このことをヘーゲルは、こうした環境論の法則は「有機体の多様性には相応しない貧弱さをすぐに示す」と述べている。また、この法則に合致しているように見える動物においても、動物的有機体と環境との関係は必然性と呼ぶには不十分なものである[32]。両者の関係にはただ「大きな影響 der große Einfluß」が認められるだけである。それゆえに、環境論は否定される。これがα節で展開されている議論の内容と、環境論に対するヘーゲルの批判点である[33]。

ここで注目すべきは、ヘーゲルが上記の環境論を批判する際に、みずからに特有の「概念」概念に言及し、そこから上記の法則が必然性を欠いていることを示す点である。この箇所の分析をとおして、動物的有機体論におけるヘーゲルの必然性概念の基本的な形を以下に示す。ヘーゲルによる環境論に対する批判をあらためて整理すると次のとおりである。たしかに、空を飛ぶ動物が空を飛ぶために必要な翼を備えており、水中に棲む動物が水中で棲息するために必要な呼吸器官を備えており、北方に棲む動物が寒さから身を守るために厚い毛皮を持っている、といったことは数多く観察され

2000, 124–34 ; Stern 2002, 106–9; Houlgate 2013, 126–9）。本稿では各節の連関を示すことを試みる。

[30] Element は『現象学』においては通常「境位」やそのまま「エレメント」と訳されるが、ここでは生物が棲む場所を意味しているので「環境」と訳出した。

[31] ここでの Freyheit は肯定的な意味で用いられていない。Freyheit には自由奔放や無拘束の意味があり、ここではその意味で用いられている。

[32] その理由は次段落で詳述する。

[33] 本段落の引用はすべて（GW9, 145–6）からのものである。

る。しかし、ヘーゲルによれば、このことは数多くあるというだけで、そこに必然性はない。このことを指摘する際に、ヘーゲルはみずからに特有の「概念」概念に言及している。

> それゆえに、有機的なものの環境的なものへのこうした関係は実際には法則と呼ばれるべきではない。なぜなら、一方では、すでに注意したように、こうした関係はその内容から言って有機的なものの範囲を汲み尽くすことは決してないし、他方では、関係の両契機自体も相互に没交渉であるにとどまり、いかなる必然性も表していないからである。陽電気の概念のうちに陰電気が存するのと同じく、酸の概念のうちには塩基の概念が存する。これに対して、厚い毛皮が北方と、あるいは魚類の構造が水中と、鳥類の構造が空中と一緒に見出されることがしばしばあろうとも、北方の概念のうちに厚い毛皮の概念が、海中の概念のうちに魚類の構造の概念が、空中の概念のうちに鳥類の構造の概念が存するわけではない。（GW9, 146）

この引用が示す、ヘーゲルの環境論に対する批判の重要な点は、陽電気と陰電気の関係のように、有機的なものと環境との関係はなっていないということである。言い換えれば、陽電気と陰電気の関係の場合には、一方の概念が他方の概念をそれ自身において持つという関係が成立しているのだが、有機的なものと環境との関係はそうはなっていない。前者の関係においては、一方の概念は他方の概念に依拠しているため、一方が存在すれば他方は常に存在する。これに対して、環境論では、ダチョウのように、鳥の構造を持ちながらも、空に棲むことのない動物が存在することから、有機的なものの概念はそれが属す環境の概念のうちに時に存在せず、それゆえに有機的なものと環境との関係を扱う環境論に必然性はない、とヘーゲルは考える。これに対して、陽電気と陰電気、酸と塩基は、上記の引用で必然性のない環境論と対比されていることから明らかなとおり、必然性を持つ。ここにヘーゲルの必然性の基本的な形が明らかになっている。陽電気と陰電気、酸と塩基の関係が示すように、ヘーゲルにとって必然性とは、必然性の関係を構成しているそれぞれの概念がそれぞれをそれ自身において持つ関係のことである。この必然性から見て、環境論は引用箇所が示すとおりであるから、有機的なものと環境との間には大きな影響があるとしか言えない。あるいは、「したがって、実在的な存在者自身に即しては見出されないのであるから、必然性と言っても、目的論的関係と呼ばれるところのものである」にすぎない。ここでの目的論的関係とは、ヘーゲルは明言していないが、マクシミリアン・ショルツが定式化しているように、「肉食動物はみずからの獲物を狩ることができるために鋭い爪や歯を持たねばならない、あるいは、寒い地域に棲む動物はそれによって寒さから自分自身を守るための厚く毛深い毛皮を持つ」（Scholz 2020, 376 傍点引用者）といった関係

を指す。しかし、この関係は「関係づけられるものに対して外面的であり、したがって、むしろ、法則とは正反対のものである、そういった関係である」[34]。言い換えれば、環境論の必然性は、有機的なものと環境との間にありもしない関係を見出す、第3者が介在することによって成立する、法則が扱う対象にとって外面的なものである。これに対して、ヘーゲルの必然性では、必然性の関係を構成しているそれぞれの概念が各々をそれ自身において持つため、必然性はそれら概念にとって内面的である[35]。以上がヘーゲルの必然性概念の基本的な形である[36]。

たしかに、環境論はヘーゲルの必然性には適さないが、蓋然的なもしくは帰納的な必然性を持つとは言えそうである。実際に、ヘーゲルは有機的なものと環境との間には大きな影響があることを認めている。それゆえに、蓋然的な必然性も必然性の一部としてヘーゲルは認めていたのではないか、こうした疑問が生じてくることが予想される。

しかし、ヘーゲルは蓋然的な必然性を否定している。このことを確認することをとおして、ヘーゲルの必然性概念をより特定する。ヘーゲルが蓋然的な必然性を否定しているのは「観察する理性」の「a）自然の観察」においてである。「蓋然性 die Wahrscheinlichkeit」は「真理 die Wahrheit」と比べれば無意味である、とヘーゲルは明確に述べている。というのも、蓋然性が高いとか低いとか述べることができるのは、真理と比較することができるからであるが、真理をすでに知っているのであれば、蓋然性を考慮する必要がなくなり、蓋然性の高低を述べることが無意味な言明となるからである。「蓋然性はいかに大きかろうと真理に比すれば無なのである」（GW9, 143）。

---

[34] 本段落の『現象学』からの引用はすべて（GW9, 146）からのものである。

[35] ヘーゲルにとって外面的な目的論は真の目的論ではない。4.2で論じる生命力の目的論的関係は内面的な目的論であり、ヘーゲルにとって真の目的論である。ショルツは外面的な目的論について「破壊的な読解 *a destructive reading*」ではなく、「生産的な読解 *a productive reading*」が可能であることを示している（Scholz 2020）。しかし、後者の可能性については、本稿の課題の範囲外となるため、考察しない。

ヘーゲルはこの箇所では「外面的 äußerlich」を非実在的とほぼ同じ意味で用いている。このことは直前の引用における用法から明らかである。本稿でも「外面的」と述べる際には非実在的を含意しているものとする。また、「外面的」の対義語である「内面的」という語を本稿で用いる際には実在的という意味を含意しているものとして扱う。このことは目的論を論じる4.2において重要になる。直前に引用した箇所をその周辺箇所と併せて引用すれば、このことはより一層明らかである。「〔環境論の〕必然性は、その存在者の内面的な必然性としてはまったく概念把握されえないものであるから、感覚的定在を持つことをやめもするのであり、もはや現実に即して観察されえず、現実からは脱却してしまっている。したがって、実在的な存在者自身に即しては見出されないのであるから、必然性と言っても、目的論的関係と呼ばれるところのものである、つまり、関係づけられるものに対して外面的であり、したがって、むしろ、法則とは正反対のものである、そういった関係である」（GW9, 146）。同様の用法は『大論理学』「生命章」「A 生きた個体」においても見られる（cf. GW12, 183–4）。

[36] ヘーゲルの必然性についてのこの理解が基本的であるのは、ここに目的論が関係するからである。ヘーゲルの目的論的必然性の十分な理解については4.2で論じる。

したがって、ヘーゲルにとって蓋然性は必然性ではないし、さらには無意味なものである。

この議論の流れで、ヘーゲルは真の必然性を備えた法則がどのようなものであるのか述べているので、その箇所を分析し、ヘーゲルの必然性概念の基本的な形をあらためて提示する。ヘーゲルにとって真なる法則とは、それ自体「概念」であるような法則である[37]。ヘーゲルはみずからにとって「概念」としての法則こそが真なる法則であることを明確に述べている。「それゆえに、法則が法則として妥当するのは、それが現象のうちに現れるからであると同時に、それ自体において概念であるからである」（GW9, 143）。法則が「概念」であるものの例としてヘーゲルが挙げているのは、ヘーゲル自身はそう名付けていないが、「落下の法則」と呼ぶべきようなものである。この法則が表す事象は、石を持ち上げて手放せば、石は落下するというものである。この法則が真であるのは、ヘーゲルによれば、「石が重さのうちに即且対自的に地面への本質的関係を持ち、そしてこの関係が落下として現れてくるから」（GW9, 143）であり、決して数多くの石について上記のことが試みられたからではない。つまり、この法則が正しいのは帰納法によって確かめられたからではなく、石の重さの概念のうちに地面の概念が存在し、地面の概念のうちに石の重さの概念が存在するからである[38]。落下の法則を分析することを通して、ヘーゲルの必然性概念の基本的な形があらためて確かめられたと思われる。

こうした必然性についての理解を踏まえて、反比例の法則に対するヘーゲルの批判を整理し直すと次のようになる。ヘーゲルの批判とは、感受性が増加するにつれて反応性も減少するという反比例の法則は、感受性が増加するにつれて反応性も増加するという正比例の法則としても表現できるために、感受性と反応性との間の必然性は失われ、それゆえに法則の名に値しないというものであった。このことを「概念」の形式にしたがってあらためて言い表すと次のとおりになる。すなわち、反比例の法則に

---

[37] ヘーゲルは最終的には「法則 das Gesetz」という考えを否定する。というのも、ヘーゲルにとって法則とは動的なものを固定的な形式において表現するものだからである。そのため、ヘーゲルの法則という表現は奇妙に思われるかもしれない。しかし、ヘーゲル自身この箇所ではみずからの考えについて述べる際に法則という言葉を用いているので、本段落ではヘーゲルの法則という表現を用いる。ただし、ヘーゲルの法則とは、動的なものを動的なものとして捉える「概念」としての法則であり、悟性的な法則ではない。ヘーゲルは次のように述べている。「このようにして有機的なものにおいては、法則という表象一般が消え失せてしまう。法則は静止する両側面として対立を把握し表現しようと欲するのであり、対立をその両側面の相互の関係を構成する規定性としてその両側面において把握し表現しようとする」（GW9, 156）。また次のようにも述べられている。「—このようにして、〔有機的なものという〕内容に関して、純粋に存在する区別項を普遍性の形式のうちに静止して受容するにすぎないそうした諸法則はここでは維持されるべきではなく、維持されるべきは、この区別項において直ちに概念の不安定をも備えており、したがって同時に両側面の関係の必然性をも備えているところの諸法則である」（GW9, 156）。

[38] 明言されていないため断定できないが、ヘーゲルにとって「概念」としての落下の法則は目的論的な法則である。定式化すれば、「石は地面に落下するために重さを持つ」となるだろう。

おいては、感受性の概念のうちに反応性の概念が存在しないがゆえに、両者の間に必然性は存在しない。キールマイヤーとシェリングの法則を、基本的な形におけるヘーゲルの必然性概念についての理解を踏まえてあらためて見直すとこのようになる。

以上から、キールマイヤーとシェリングの法則による動物的有機体の捉え方が、なぜ生命あるものを、観察する理性の態度である存在と持続の形式において捉えることになるのかが明らかとなっている。キールマイヤーとシェリングの法則では、感受性・反応性・再生の間に内面的な関係が失われる。それゆえに、3 つの生命力の関係はそれらとは異なる別のものによってもたらされねばならない。しかし、ヘーゲルにとって、生命あるものとは統一体である。生命あるものは、別々の部品が組み合わされ、そこに外的な目的が挿入されることによってはじめて統一づけられる機械のようなものではない。生命あるものにおいては、はじめからみずからを構成するそれぞれの部分が相互に連関を持っている。しかし、キールマイヤーとシェリングによる反比例の法則は正比例の法則としても表現できるがゆえに、彼らの法則では 3 つの生命力が内面的に連関を持つものとして捉えられないため、彼らの立場を代表する観察する理性は生命あるものを存在と持続の形式において捉えることに陥っている[39]。

最後に、α 節で述べられているヘーゲルの必然性概念についての理解なしに、γ 節における反比例の法則に対するヘーゲルの批判を十分に理解することはできないことを証明する。α 節での必然性概念があらかじめ理解されていなければならないのは、ヘーゲルの批判とは、反比例の法則は正比例の法則としても表現できるというもので、これだけではどのような意図を持った批判であるのかが判然としないからである。加えて、必然性についての理解をあらかじめ必要とするという本稿の主張を裏付けるものとして、ヘーゲルは反比例の法則における感受性と反応性の量的な区別は「概念」と必然性を欠いていると明確に述べている。「それゆえ、存在する区別としての区別が現れる仕方は、区別が没交渉的な区別である、すなわち量としてあるというまさにこのことである。しかし、この量においては、概念は消去され、必然性は消滅してしまっている」(GW9, 157)。この引用から、反比例の法則の欠陥には「概念」と必然性が関係していることが読み取れる。「観察する理性」の動物的有機体論において、ヘーゲルにとっての「概念」と必然性がどのようなものであるのかを明瞭に論じている箇所は α 節である。したがって、α 節における必然性概念の理解なしに、γ 節での反比例の法則に対するヘーゲルの批判は十分に理解できない。ヘーゲルが反比例の法則を批判するのは、その法則が論理的本性ないし「概念」を欠いているからであるが、このことをより詳らかにすれば、感受性の概念が反応性の概念をそれ自身において備えて

[39] 本稿は観察する理性がこうした立場に陥る理由に焦点を当てて解釈した。この点で本稿はバーガーの解釈を補うものである（cf. Berger 2021, 206）。注 28 で予告したとおり、生命あるものを生命あるものとして把握できないことがキールマイヤーとシェリングの法則に対するヘーゲルの批判の眼目である。

おらず、反応性の概念が感受性の概念をそれ自身において備えていないからである。このことがヘーゲルが反比例の法則を批判する根拠である。まさにそれゆえに、ヘーゲルは次のように述べる。「それゆえに、〔反比例の法則といった〕法則定立のそのような空しい遊戯は有機体の諸契機にだけかぎったことではなく、あらゆるところであらゆるものについて行われることができるのであり、一般的に言えば、こうした諸対立の論理的本性についての無知に基づいている」(GW9, 153)。以上から、「観察する理性」の動物的有機体論を解釈する際には、従来の解釈のように α 節・β 節・γ 節を独立に読解するのではなく、それぞれの箇所で論じられている議論を相互に参照し合いながら読むことが求められていると言える。

4 ヘーゲルの生命力論

以上ではキールマイヤーとシェリングの生命力論に対するヘーゲルの批判を再構成したのに対し、本章ではヘーゲル自身の生命力論を分析し提示する。4.1 では、本稿が提示した問い、すなわち、感受性・反応性・再生の論理的本性に基づいた関係とはいかなるものであるかに対する本稿の考えを示す。4.2 で、その関係が何を根拠にして成立しているのかを明らかにする。ただし、その根拠の妥当性については考察対象としない。ここで本稿が意図していることは、ヘーゲルの生命力論が無条件的に妥当するかではなく、ヘーゲルがみずからの生命力論を論じるときに前提としているものは何であるかを明らかにすることである。

4.1 感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係の解明

感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係とはいかなる関係であるか。それは、感受性の概念のうちに反応性と再生の概念が、反応性の概念のうちに感受性と再生の概念が、再生の概念のうちに感受性と反応性の概念が存する関係である。このことは 3.2 で論じたヘーゲルの必然性概念からおのずと明らかである。このことをヘーゲルはみずからの生命力論を展開していると思われる段落で次のように述べている。「—他方で、感受性は反作用ないし反応性からも再生からも本質的に分離されず、不可分である普遍的な契機である」(GW9, 152)。この引用から明らかなとおり、ヘーゲルにとって、感受性・反応性・再生の関係は、反比例の法則におけるそれらの関係とは異なり、それら 3 つの生命力が本質的に相互に連関を持つ関係である。

3 つの生命力の論理的本性に基づく関係は相互に相互をそれ自身において備えているという在り方をしているがゆえに、たとえば、感受性と反応性との関係に限定して述べれば、反応性が存在するところには「同一量 dieselbe Größe」の感受性が存在することになる。反応性の概念のうちに感受性の概念が存するがゆえに、反応性が存在するところには感受性が必然的に存在する。そして、両者は自己の再生という目的を

目指して働く同一の働きの両側面であるから同一量において存在する。それゆえに、ヘーゲルはみずからの生命力論を展開していると考えられる段落の最後で次のように述べている。

> ここから結論として出てくるのは、現実のいかなる様態においても、反応性と同一量の感受性—というのは、我々はさしあたって感受性と反応性相互の関係を考察しているからである—が現にあるに違いないということ、有機体の現象は感受性と反応性とのうちのいずれによってもまったく同じように把握され規定されうるということ、あるいは人の好みにまかせて言えば、説明されうるということである。〔中略〕もし感受性と反応性とが構成因と呼ばれ、そしてこれが無意義な言葉でないと言うのならば、まさにこのことによって言明されているのは、両者が概念の契機であること、したがってこの概念が本質を形づくっているところの実在的な対象〔動物的有機体〕は両者を同じ仕方でみずからに備えていること、またこの対象がある仕方において非常に感受的であると規定されると、他の仕方においてまったく同じ程度に反応的であるとまったく同様に言われうるということである。(GW9, 152)

ヘーゲルにとって、生命力はお互いに不可分であるがゆえに、感受性と反応性は同一量において存在する[40]。ヘーゲルは明言していないが、このことは感受性と再生との関係などにおいても同様であると考えられる。したがって、論理的本性に基づく生命力の関係における 3 つの生命力は同一量において存在する[41]。

---

[40] 上の引用と同じことをヘーゲルは反比例の法則を批判した直後にも述べている。「〔感受性と反応性という〕有機体の諸契機もそれらの実在的なものにおいても、実在的なものの量であるところのそれらの量においても等しく不可分である。一方の契機はただ他方の契機とともにのみ減少し、他方とともにのみ増加するのである。なぜなら、一方が意義を持つのは、端的にただ他方が現にあるかぎりにおいてのみだからである」(GW9, 153)。

[41] ヘーゲルの生命力論における同一量はキールマイヤーとシェリングの生命力論が正比例の法則であるときとどのように異なるのか疑問に思われるかもしれない。ヘーゲルは反比例の法則のすべてを批判しているわけではない。反比例の法則にもある種の正しさはある。その正しさとは、感受性と反応性とを媒介するものが両者にとって内面的に存在することを反比例の法則が暗示していることである。それゆえに、ヘーゲルは次のように述べている。「かえって有機的な存在は内なるものと外なるものとの内容として不可分にそもそも根底に置かれており、両者に対して同一のものである。それゆえに、対立と言っても、これはまったくの形式的な対立であるにすぎず、この対立の実在的な両側面と言っても同一の自体をその本質に持っているのである。しかし同時に、内なるものと外なるものとは相互に対立した実在でもあり、また観察に対しては相異なる存在であるから、両者は観察にとっては各自固有の内容を持つように見える。しかし、この固有の内容は、同一の実体あるいは有機的な統一であるから、実際にはこの統一の相異なる形式でしかありえない。そしてこのことは、外なるものは内なるものの表現でしかないということにおいて、観察する意識によって暗示されていることである」(GW9, 149–50)。注 23 で確認したように、ここでの内なるものと外なるものは、生命力と組織、あるいは感受性と反応性、感受性と再生を指している。観察する意識は「外なるものは内なるものの表現である」という法則を立てることによって、外なるものと内なるものとの間になんらかの関係、言い換えれば「有機的な統一」を暗に認めているのであるが、このことを自覚して

ヘーゲルの生命力論はキールマイヤーとシェリングの法則とは異なり必然性を備えている。それは、3 つの生命力が相互に相互をそれ自身において備えているからである。ところで、この必然的な関係は何を根拠にして成立しているのだろうか。もしヘーゲルの上記の関係がどこにも根拠を持たないのであれば、ヘーゲルの生命力論は一般的な意味で独断論に陥ると思われる。しかし、ヘーゲルはみずからの生命力論が立脚する根拠をγ節に先行するβ節で提示している。あらかじめその根拠を述べれば、その根拠とは実在的な目的である。ヘーゲルの必然性とは、周知のとおり、目的論的必然性である。さらに、ヘーゲルの目的論における目的は実在するため、ヘーゲルの必然性は実在的な目的論的必然性であると言える。この実在的な目的論的必然性における実在的な目的が上記の 3 つの生命力の関係を成立させている。次節では、実在的な目的がヘーゲルの生命力論の特殊な構造をどのように成立させているのかを明らかにする。その際に、ヘーゲルの目的論が無条件に妥当するかについては本稿の問いを超えるため論じない。

4.2 論理的本性に基づく生命力の関係の根拠としての実在的な目的

ヘーゲルが「観察する理性」においてみずからの実在的な目的論的必然性について述べている箇所は、そのタイトル通り「β）目的論」においてである。β節において、ヘーゲルは、カントが『判断力批判』で論じている目的論を批判しつつ、みずからの目的論を展開している。以下では、β節の議論を再構成することをとおして、なぜ論理的本性に基づく生命力の関係には実在的な目的が必要不可欠であるかを明らかにする。

その論証過程をあらかじめ簡潔に記しておくと次のとおりである。まず、β節でのヘーゲルの論述を整理し、カントの目的論の目的が実在しない点をヘーゲルはβ節で批判していることを確認する。次に、ヘーゲルの目的論とカントのそれとの違い、言い換えれば目的が実在するか否かがどのように生命力の論理的本性に基づく関係と関連するのかを示し、生命力の論理的本性に基づく関係には実在的な目的が必要不可欠であるとヘーゲルが論じていることを確認する。ここまではヘーゲルの論述の表面をなぞっただけで、どのように実在的な目的が必要であるかを分析するまでには至っていない。最後にこの点を分析し、本稿の（2）の主張を論証する。

以下にβ節における議論を整理し、本段落以降で展開する論述の基礎とする。β節は環境論について論じているα節の最後に示された「目的論的関係」を起点に議論を

いない。それゆえに、キールマイヤーとシェリングの法則は有機的な統一を暗示している点で正しいが、それを自覚していない点で誤っている。したがって、キールマイヤーとシェリングの法則が、感受性が増加するにつれて、反応性も増加すると正比例の形で表現されるとき、ヘーゲルの生命力論（感受性と反応性は同一量において存在する）と見かけは同じだが、前者の法則は有機的な統一を欠いている点で異なる。

開始する。つまり、北方に棲む動物は寒さから身を守るために厚い毛皮を持つといった「先に〔α節で〕言及された有機的なものと環境的自然との関係〔目的論的関係〕は有機的なものの本質を表現していないが、これに対して有機的なものの本質は目的概念のうちに含まれている」(GW9, 146) という文章からβ節へと議論は移行する。ヘーゲルによれば、動物的有機体は、「したがって、有機的なものは〔他者への〕関係においてさえも自己を維持する」(GW9, 145) という定義から「実在的な目的自身 der reale Zweck selbst」(GW9, 146) である。それゆえに、「有機的なものの本質は目的概念のうちに含まれている」(GW9, 146)。これに対して、カントの目的論が反映されている「この観察する意識にとっては、なるほど、目的概念は有機的なもの自身の本質ではなく、目的概念はその外にあるものであり、したがって〔環境論の〕かの外面的な目的論的関係であるにすぎない」(GW9, 146)。これはカントが『判断力批判』のなかで、目的を反省的判断力にとっての統制的概念としてのみ認め、結局は目的に実在性を認めなかったことによるものと考えられる。ヘーゲルにとって正しい目的論は、関係づけられるものにとって外面的な目的論ではなく、内面的な目的論である。カントもまた目的を外的合目的性と内的合目的性とに区別し、有機的存在者に後者の目的を認めている (cf. Kant 2009, 277–82)。しかし、最終的にカントは目的に実在性を認めないため、「観察する理性」におけるヘーゲルの内面的・外面的の用法に従えば、カントの内的合目的性は外面的な目的論とみなされ、批判される。言い換えれば、ヘーゲルは、注 35 で示したように、内面的を実在的と、外面的を非実在的とほぼ同じ意味で用いているため、カントの目的論は外面的な目的論とみなされ、批判される[42]。β節で主な争点となっているのは目的が実在するか否かであり、ヘーゲルは目的の実在性を擁護する立場からカントの目的論を批判している[43]。以上がβ節における議論の概観である。

ヘーゲルの目的論とカントのそれとの違い、言い換えれば目的が実在するか否かは、論理的本性に基づく生命力の関係にとってどのように重要であるのか。この問いに対する答えは、以下で両者の立場をβ節におけるヘーゲルの論述に沿ってより明確にすることを通して与えられる。ヘーゲルによれば、動物的有機体はその定義により実在的な目的自身であるが、これに対して、観察する意識は目的概念を次のように認識している。

---

[42] この点については (GW9, 500) と金子 (1971, 533–4) を参照。また、同様の批判は、Illetterati and Gambarotto (2020) の解釈に従えば、『信仰と知』においても見出せる。

[43] β節におけるその他のカントの目的論に対するヘーゲルの批判に関しては次の注で簡単に論じる。

注 35 で述べたとおり、本稿で用いられる「内面的」と「外面的」はすべてヘーゲルの用法に従う。

有機的なものは自己自身を維持するもの、自己のうちへと還帰するもの、自己のうちへと還帰したものとして現れる。しかし、この存在のうちに、この観察する意識は目的概念を認識しない。言い換えれば、目的概念がほかのどこかの悟性のうちにあるのではなく、まさにここに現実存在しており、物として存在しているというこのことを、観察する意識は認識しない。観察する意識は目的概念と自分だけで存在し自己自身を維持することとの間に区別を立てるが、この区別はいかなる区別でもない。この区別がいかなる区別でもないということは、この意識に対してあることではない。この意識に対してあることは、働きをとおして生じるものに対して働きが偶然的で没交渉的に現象するということである。そして、両者を結合する統一があるのに、—この観察する意識にとっては、かの働きとこの目的とは離れ離れに存するのである。(GW9, 148)

ヘーゲルにとって、動物的有機体は自己を維持する実在的な目的自身であるから、自己を維持する働きと自己を維持するという目的とは統一されている。これに対して、観察する意識はこのことを正しく認識しない。観察する意識は自己を維持する働きを目的に対して没交渉的なものとみなしてしまう。このようにみなしてしまうのは、目的が有機的なものに実在することを把握しないからである。それゆえに、「そして、両者を結合する統一があるのに、—この観察する意識にとっては、かの働きとこの目的とは離れ離れに存するのである」。これに対して、ヘーゲルは動物的有機体のうちに目的は実在すると認識しているため、「働きはそれ自身において自己へと還帰する働きであり、なにか外来のものによって自己へと導き戻された働きではない」(GW9, 149)ことになる。この引用から明らかなとおり、ヘーゲルの目的論では、自己を維持する働きと自己を維持するという目的との関係はそれら両者にとって内面的であることになる。以上から、観察する意識の目的論では、自己を維持する働きである感受性・反応性・再生はなんらかの第 3 者によって結び付けられる外面的な目的論的関係となり、4.1 で示した論理的本性に基づく生命力の関係を構成しない。これに対して、ヘーゲルの目的論では、働きは自ずと自己へと還帰するから、働きと目的との関係にとって外面的な第 3 者によって結び付けられる必要がなく、論理的本性に基づく生命力の関係が構成される。それゆえに、ヘーゲルは β 節の最後の段落で次のように述べている。「しかし、普遍性〔目的〕と働きとのこうした統一はこの観察する意識に対してあることではないが、それはその統一が本質的に有機的なものの内的な運動であり、ただ概念としてのみ把握されうるからである」(GW9, 149)。以上のような仕方で、ヘーゲルの目的論とカントの立場が反映されている観察する意識の目的論との違いは論理的

本性に基づく生命力の関係にとって重要である[44]。つまり、ヘーゲルによれば、目的が実在しなければ、論理的本性に基づく生命力の関係は成立しない。

以上で、ヘーゲルの目的論では、感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係には実在的な目的が必要不可欠であることが示された。ただし、どのように必要不可欠であるのかは依然として不明瞭なままであると思われる。というのも、以上ではヘーゲルの論述を表面的に要約しただけで、その分析にまで至っていないからである。そこで以下では、ヘーゲルの目的論の中身を分析することをとおして、どのように実在的な目的が論理的本性に基づく生命力の関係を成立させているのかを解明する。β節のなかで、ヘーゲルがみずからの実在的な目的論的必然性について述べている箇所がある。その箇所も一見して難解なため、該当箇所を全文引用し、その箇所の説明を試みる。この説明をとおして、まず、ヘーゲルはこの箇所で必然性という言葉しか用いておらず、この必然性が目的論的であるか一見してわからないため、ここで言われている必然性がそもそも実在的な目的論的必然性であることを確認する。それから、この必然性を論理的本性に基づく生命力の関係に適用し、実在的な目的がその関係をどのように成立させているのかを分析する。

以下にヘーゲルがみずからの必然性概念を目的論との関連で述べている箇所を全文引用し、この必然性が実在的な目的論的必然性であることを示し、その過程でその必然性の内容を分析する。α節の環境論から取り出したヘーゲルの必然性概念は、AとBの間に必然性があるとしたら、Aの概念のうちにBの概念が存在し、Bの概念のうちにAの概念が存在するといった関係を指すものであった。α節からは必然性ということで、こうした関係しか取り出すことができなかった。β節では、この必然性概念

[44] ヘーゲルはカントの目的論を批判する際に次のように述べている。「このように普遍的なもの〔目的〕から見放されたときには、有機的なものの活動はただ存在するものとしての存在するものの働きであるにすぎなくなる。すなわち、有機的なものの活動は、酸や塩基の働きのように、〔働きでありながら〕同時に自己へと還帰しているのではない働きであることになる。〔そこで、有機的なものの〕活動はみずからの直接的な定在から脱却することができず、また〔酸と塩基のように〕自分に対立するものと関係するに至ったときには消え失せるところの定在を放棄することもできない活動でありながら、しかし自己を維持することはできる活動であることになるだろう」（GW9, 148–9）。酸と塩基は中和すると化合物となり、自己を維持することができないため、酸や塩基の働きは自己を目的として自己へと還帰しない。これに対して、動物的有機体は環境との関係においても自己を維持するものであるから、自己目的的である。もし目的が実在しなければ、動物的有機体は自己を維持することができないが、現実には動物的有機体は環境との関係においても自己を維持しているため、カントのように目的を非実在的なものと捉えると矛盾が生じてしまう。それゆえに、ヘーゲルによれば目的は実在する。また、ヘーゲルはカントの目的論を「理性章」冒頭で論じている思考と存在の一致との関連でも批判している（cf. GW9, 146–7）。『現象学』を扱ってはいないが、この問題との関連でヘーゲルによるカントの目的論に対する批判を分析している研究として Illetterati and Gambarotto（2020）を参照。これらがヘーゲルによるカントの目的論に対する批判であるが、これらの批判が妥当であるかは本稿の研究範囲を超えるため、これ以上は扱わない。

に目的論が付加されている。ただし、ここでの目的論は環境論のような関係づけられるものに対して外面的なものではなく、内面的なものである。このことを以下に示す。

> 必然性は生じるものにおいては隠れていて、終わりにおいて初めて自己を示すが、示すというのは、まさにこの終わりが必然性は始めでも〔始めから〕あったというように示すのである。しかし、終わりがそれ自身のこうした先在性を示すのは、働きが〔途中で〕変更を企てたとしても、この変更によっては、すでにあったものより以外のなにものも出てくるのではないことによっている。あるいは、我々が始めから着手するならば、この始めはその働きの終わりにおいて、言い換えれば、その働きの結果においてただ自己自身に還帰するだけであり、まさにこのことによって、始めはみずからが自己自身をその終わりにおいて持つようなものであることを示すのであり、したがって始めは始めとしてすでに自己に還帰していたことを、言い換えれば、即且対自的にあるものであることを示すのである。したがって、始めがその働きの運動によって達成するものは自分自身であり、始めがただ自己自身だけを達成するにすぎないということはその自己感情である。このようにして、なるほど、始めがそうであるところのもの〔始め〕と始めが求めるところのもの〔終わり〕との区別が現にあるにはあるが、しかしこれはただ区別の外観であるにすぎず、したがって始めはそれ自身において概念なのである。（GW9, 147）

ヘーゲルによれば、必然性とは、生じたものにおいて、結果から原因が回想され、その原因はその結果以外のいかなる結果も生み出さなかったと回想されるような関係を意味している。すなわち、ヘーゲルの必然性とは、出来事が生じてくる過程においては見えないのだが、生じ終えて結果となると、その原因が結果から明らかになり、その出来事はこの仕方以外に生じることはありえなかったというように回想されるような関係を指す。この必然性は、この結果のために諸々の原因があった、と定式化できるため目的論的必然性である[45]。加えて、上記の引用文中で「しかし、終わりがそれ自

[45] ルードヴィッヒ・ジープは、ここでのヘーゲルの目的論は有機体が本来的な自己を実現するというアリストテレス的な目的論であり、本稿が提示するような目的論ではないと主張している（Siep 2000, 129）。ジープはそのように解釈すべき理由について詳述しないため、どのように2つの解釈が対立しているのか定かでない。しかし、これら2つの目的論は互いに排斥し合う関係にはないと考えられる。ヘーゲルがここでの目的論の具体的な出来事として考えているのは食事である。ヘーゲルは目的論的必然性の定義について述べた段落の次の段落で「動物の本能は餌を求め、これを食いつくすが、しかし、そうすることによってこの本能は自分以外の別のものを生み出すのではない、〔中略〕動物は自己感情でもって終わる」（GW9, 147）と述べている。この出来事は、アリストテレス的な目的論では、動物は目的である自己の形相を維持ないし実現するために食事をすると表現される。この表現は本稿が提示する解釈に難なく組み込める。すなわち、動物の自己の本質の維持ないし実現が生じたのは食事をしたからであり、この実現のために食事があった、と言い表すことができる。したがって、両解釈は両立する。厳密に言えば、アリストテレス的な目的論の方が概念の範囲が狭いため、本稿が提示する目的

身のこうした先在性を示すのは、働きが〔途中で〕変更を企てたとしても、この変更によっては、すでにあったものより以外のなにものも出てくるのではないことによっている」と言われていることから、この目的論的必然性における目的は実在的であることが看取できる。というのも、非実在的な目的であれば、目的は原因と結果の関係にとって外面的で、第3者によってあとから挿入されるため、すでにあったものとは別のものが生じてくることは十分に可能であっただろうからである。以上で、ヘーゲルがこの箇所で述べている必然性概念が実在的な目的論的必然性であり、α節からβ節へ移行するにつれて、必然性概念に目的論的な性格が付与されていることを確認した。そして、その確認とともに、その内容についても明らかにした。

ヘーゲルは「有機的なものは或るものを生み出すのではなく、ただ自己を維持するだけであり、言い換えれば、生み出されるものは、生み出されるものであるとまったく同様にすでに現にあるものである」(GW9, 146) と述べており、この必然性のもとでみずからの動物的有機体論を論じていることは明白である[46]。それではなぜヘーゲルの動物的有機体、すなわち生命力の論理的本性に基づく関係はこの必然性を備えていなければならないのか。以下ではこの必然性がどのようにして論理的本性に基づく生命力の関係を成立させているのかをヘーゲルの論述に沿って論証する。はじめに、なぜ論理的本性に基づく3つの生命力の関係は目的論的でなければならないのかを明らかにすることによって、その関係には目的論的必然性が必要不可欠であることを示す。それから、その目的論的必然性における目的が非実在的であった場合には、論理的本性に基づく生命力の関係が崩壊してしまうことを示すことによって、その関係には実在的な目的が必要不可欠であることを示す。

なぜ論理的本性に基づく3つの生命力の関係は目的論的でなければならないのか。それは、その関係が目的論的でなければ、3つの生命力が自己を再生する1つの働きとして統一されることがありえなくなるからである。その理由は次のとおりである。

論はアリストテレス的な目的論にまで制約されなければならないが、本稿が提示する目的論の構造は変わらない。ヘーゲルの目的論をアリストテレス的な目的論として解釈することが重要なのは類との関連においてであるが、本稿では類としての動物的有機体論は扱わないため、本文の解釈においてはこの点を強調していない（cf. Stern 2002, 108）。

[46] この引用の周辺箇所も併せて引用すれば、ヘーゲルがこの必然性のもとでみずからの動物的有機体論を論じていることはより一層明らかである。「しかし、先に有機的なものに与えた規定が示すように、有機的なものは実際に実在的な目的自身である。なぜなら、有機的なものは他者との関係においてさえ自己を維持することによって、有機的なものは自然的な存在者ではあるが、そのなかではその自然本性が概念へと還帰しており、必然性においては離れ離れに置かれていた原因と結果、能動的なものと受動的なものといった諸契機が一者へと総合されているところのまさにそうした自然的な存在者である。そのため、ここでは、或るものはただ必然性の結果としてのみ登場してくるのではない。或るものは自己へと還帰しているのだから、最後のものないし結果は運動を始めるところの最初のものでもあり、また自分が実現するところの目的でもある。有機的なものは或るものを生み出すのではなく、ただ自己を維持するだけであり、言い換えれば、生み出されるものは、生み出されるものであるとまったく同様にすでに現にあるものである」（GW9, 146）。

すなわち、目的論的ではない関係において 3 つの生命力が働いて自己の再生をしているとすると、3 つの生命力がそうするのはまったくの偶然になってしまう。というのも、なぜ感受性・反応性・再生はそのように働いているのかや、なぜ感受性は反応性を引き起こし、反応性は再生を引き起こすのかといった問いに対する答えとして挙げられるのは、まったくの偶然によってか、自己を再生するため以外にはありえず、3 つの生命力を非目的論的な関係において考察しているここでは、3 つの生命力が働いて自己を再生しているのはまったくの偶然によることになるからである。3 つの生命力がまったくの偶然によって働いて自己の再生をしているのであれば、各々の生命力は各々にとって外在的であることになる。3 つの生命力の関係が目的論的でない場合には、3 つの生命力は互いに対して外在的であり、離れ離れに存在するため、論理的本性に基づく関係を成立させないのである[47]。

これに対して、3 つの生命力の関係が目的論的である場合には、3 つの生命力は 1 つの働きとして統一されるため、論理的本性に基づく生命力の関係が成立する。先のヘーゲルの実在的な目的論的必然性において 3 つの生命力の関係を捉え直せばこのことは明らかである。すなわち、自己の諸部分の再生という目的ないし結果から自己を再生する働きないし原因を回想するとき、感受性・反応性・再生は自己の再生のために存在するという仕方で、目的によって媒介され、統一される。それゆえに、まさにヘーゲルは次のように述べている。

> —他方で、感受性は反作用ないし反応性からも再生からも本質的に分離されず、不可分である普遍的な契機である。というのも、自己への還帰として感受性は端的に反作用をみずからにおいて持つからである。ただ単に自己へと還帰する存在は受動性ないし死せる存在であり、感受性ではないが、これは作用、あるいは反作用も自己へと還帰する存在を欠いている場合には反応性ではないのと同じである。作用ないし反作用における還帰と還帰における作用ないし反作用とは統一を得てまさに有機的なものを形づくるものであり、そうしてこの統一は有機体の再生と同じことを意味するのである。（GW9, 152）

まさに 3 つの生命力の目的である再生が 3 つの生命力を統一して 1 つの働きにしている、とヘーゲルは述べている。1 つの働きであるということは各々の生命力が各々をそれ自身において備えているということである。したがって、ヘーゲルによれば、論理的本性に基づく 3 つの生命力の関係は目的論的でなければならない[48]。

---

[47] β 節でヘーゲルが批判しているのは非実在的な目的論的必然性であり、非目的論的な必然性ではないため、ヘーゲル自身の論述からそのまま、本段落で提示したような、非目的論的な必然性に対する批判に明確に該当する箇所を引用することは難しい。しかし、この批判は一般的に言えることである。

[48] 先述したとおり、それゆえに、3.1 で示したヘーゲルのキールマイヤーとシェリングの法則に対する批判は重要である。

しかし、この目的が実在しなければ、論理的本性に基づく生命力の関係は崩壊する。なぜなら、ヘーゲルによれば、もし働きに目的があらかじめ備わっていないならば、働きが目的に寄与するのは偶然であることになるからである。それどころか、働きに目的があらかじめ備わっていない場合、働きは働きでさえなくなってしまうかもしれない。なぜなら、働きは働く方向があってこそ働くことができるが、その働きに方向を与える目的がないのであれば、働きは働くことさえできなくなるからである。そのとき、動物的有機体の働きは機械未満のものになるだろう。なぜなら、機械でさえなにかしらの目的を持って動いているからである。このことをヘーゲルは次のように述べている。

> 〔動物的有機体の外に目的概念を認識する観察する意識の〕こうした見方において有機的なもの自身に帰属しているものは、有機的なものの最初のものと最後のものとの中間に介在しているところの働きであり、個別性という性格をみずからにおいて備えている限りでの働きである。これに対して、普遍性という性格を備えている限りでの働き、働くものが働きによって生み出されたものと等しいとされた限りでの働き、すなわち合目的な働きそのものは、〔観察する意識の見方では〕有機的なものに帰属しないことになるだろう。かの個別的な働きはただ手段であるにすぎず、その個別性のゆえに、まったく個別的なあるいはまったく偶然的な必然性という規定のもとへと歩み出ることになる。それゆえに、有機的なものが個体としての自分自身、あるいは類としての自分を維持するためになすことは、この直接的な内容から言えば、まったくの無法則であることになるが、それは普遍的なものと概念とが有機的なものの外にあるからである。それによれば、有機的なものの働きはそれ自身において内容を持たない空虚な活動であることになろう。〔それゆえに、〕そうした活動は機械の活動でさえないだろう。なぜなら、機械は或る目的を持っており、目的によって機械の活動はある一定の内容を持つからである。(GW9, 148)

ヘーゲルによれば、目的が実在しないとき、自己自身を維持する働きは無法則となり、必然性を持たない。なぜなら、働きがあらかじめ目的を持たないのであれば、働きが目的に寄与しているとしても、その寄与は単なる偶然によってなされている以上の関係性を飛び越えないからである。あるいは、目的が実在しないならば、働きが目的に寄与することが必然的に見えるとしても、それは偶然的に必然性の外観を装っているにすぎない。これに対して、目的が実在するならば、「働きはそれ自身において自己へと還帰する働きであり、なにか外来のものによって自己へと導き戻された働きではない」(GW9, 149) ことになる。なぜなら、その場合、それぞれの働きはあらかじめ自己を維持するという単一の目的へと向かって働いており、働きと目的とが統一されてい

るからである。このとき、感受性・反応性・再生は目的によってあらかじめ統一されており、論理的本性に基づく関係が成立しているため、実在的な目的が論理的本性に基づく生命力の関係を成立させていると言える。以上から、論理的本性に基づく生命力の関係には実在的な目的が必要不可欠であることが十分に証明された[49]。

結論

本稿では、『現象学』「理性章」「観察する理性」におけるヘーゲルの生命力論、すなわち感受性・反応性・再生の論理的本性に基づく関係を、キールマイヤーとシェリングの法則に対するヘーゲルの批判を分析することをとおして、再構成した。その再構成をとおして、私が明らかにしたことは次のことである。すなわち、いかなる理由でヘーゲルはキールマイヤーとシェリングの法則を批判しているのか、ヘーゲルの生命力論はいかなるものであり、どのような根拠に基づいているのか、そしてこれらのことを理解するためには各節を別々にではなく統合して読まねばならない、といったこれらのことである。これらに対する本稿の結論を簡潔に提示すると次のとおりである。すなわち、ヘーゲルがキールマイヤーとシェリングの法則を批判するのは、彼らの法則が必然性を欠いているためである。ヘーゲルにとって必然性とは、α節の分析をとおして明らかにされたとおり、一方の概念が他方の概念を自らにおいて備えており、逆も同じ在り方をしている関係性のことである。そこで、ヘーゲルの生命力論は、キールマイヤーとシェリングの法則とは異なり、感受性・反応性・再生の各々が相互に各々を各自において備えているという関係となる。そして、この関係は、β節の分析から明らかとなったとおり、実在的な目的によって成立させられているのである。

以上がヘーゲルの生命力論である。ところで、ヘーゲルの生命力論とヘーゲル特有の「概念」との間には強い類似性が認められる。これまで、ヘーゲルの目的論が実在的な目的が存在すると考える目的論であることはたびたび指摘されてきたが、そのことがヘーゲル哲学にとってどのように重要であるかは自明ではなかったように思われる。もしヘーゲルの生命力論と「概念」とが同じ構造をしているのであれば、ヘーゲル哲学の根幹を成す「概念」を擁護するためには、まずもってヘーゲルの目的論を正当化しなければならないだろう。というのも、4.2 で論じたように、実在的な目的がヘーゲルの生命力論を成立させていたからである。したがって、今日、ヘーゲル哲学を 1 つの可能な哲学として提示するためには、実在的な目的をヘーゲルの論述に沿って

[49] カントとヘーゲルの目的論についての考え方の違いは究極的には動物的有機体を認識論において捉えるか、存在論において捉えるかの違いに求められるだろう（cf. Dahlstrom 1998, 174–5; Illetterati and Gambarotto 2020）。注 44 と上記で示したように、「観察する理性」では、カントは目的が感性に与えられないがゆえに、動物的有機体のうちに目的の実在性を認めないが、ヘーゲルにとってこれは矛盾であるため、ヘーゲルはカントの目的論を批判している。動物的有機体は自己を維持しており、この運動を適切に説明するためには目的が実在しなければならないとヘーゲルは考える。

正当化しなければならない。そして、この正当化を行うために、ヘーゲルの自然哲学を研究することは 1 つの非常に有力なアプローチ方法であると思われる[50]。

凡例

ヘーゲルからの引用は G. W. F. Hegel, *Gesammelte Werke*, Hamburg, 1968ff.に依拠し、略号 GW の後に巻数と頁数を付す。ただし、『エンツュクロペディー』（第 3 版）からの引用の場合は略号 GW の後に巻数と節番号を付す。
原文の隔字体（ゲシュペルト）は傍点で表す。引用文中の亀甲括弧〔〕は引用者による挿入である。
『精神現象学』の引用の訳に関しては、ヘーゲル，『精神の現象学 上巻』，金子武蔵訳，岩波書店，1971.を参照しつつ拙訳を採用している。その他の引用の訳もすべて拙訳である。

文献表

Berger, Benjamin. 2021. The Logic of Organic Forces: Hegel's Critique of Kielmeyer. In *Kielmeyer and the Organic World: Texts and Interpretations*, ed. Lydia Azadpour and Daniel Whistler. London: Bloomsbury Academic. 203–19.

Bowman, Brady. 2013. Skeptical Implications for the Foundations of Natural Science. In *Hegel and the Metaphysics of Absolute Negativity*. Cambridge: Cambridge University Press. 134–57.

Breidbach, Olaf. 1998. Das Organische in Hegels Jenaer Naturphilosophie. In *Hegels Jenaer Naturphilosophie*, hg. Klaus Vieweg. München: Wilhelm Fink Verlag. 309–18.

Dahlstrom, Daniel O. 1998. Hegel's Appropriation of Kant's Account of Teleology in Nature. In *Hegel and the Philosophy of Nature*, ed. Stephen Houlgate. Albany: State University of New York Press. 167–88.

deVries, Willem A. 1991. The Dialectic of Teleology. *Philosophical Topics* 19, no. 2: 51–70.

Ferrini, Cinzia. 2009. Reason Observing Nature. In *The Blackwell Guide to Hegel's Phenomenology of Spirit*, ed. Kenneth R. Westphal. Malden, MA: Wiley-Blackwell. 92–135.

Gambarotto, Andrea. 2018. *Vital Forces, Teleology and Organization: Philosophy of Nature and the Rise of Biology in Germany*, Cham: Springer.

Gambarotto, Andrea, and Luca Illetterati. 2020. Hegel's Philosophy of Biology? A Programmatic Overview. In "Hegel and the Philosophy of Biology." Special Issue, *Hegel Bulletin* 41, no. 3 （December）: 349–70.

原崎道彦. 1994. 「進化論とヘーゲル—なぜヘーゲルに進化論がないのか？—」. 伊坂青司・長島隆・松山寿一（共編）『ドイツ観念論と自然哲学』所収. 創風社. 113–33.

Henrich, Dieter. 2010. Hegels Theorie über den Zufall. In *Hegel im Kontext: Mit einem Nachwort zur Neuauflage*. Berlin: Suhrkamp Verlag. 158–87.

Houlgate, Stephen. 2013. *Hegel's 'Phenomenology of Spirit': A Reader's Guide*, London: Bloomsbury Publishing Plc.

Illetterati, Luca, and Andrea Gambarotto. 2020. The Realism of Purposes: Schelling and Hegel on Kant's *Critique of Teleological Judgement*. *Rivista di estetica* 74. http://journals.openedition.org/estetica/7080（accessed October 29, 2023）.

板井孝一郎. 1998. 「有機体における三つの機能特性をめぐって—ヘーゲルによる「シェリング・キールマイヤー説」批判の意義」. 『シェリング年報'98』第 6 号: 85–95.

金子武蔵. 1971. 「訳者註 その一」. ヘーゲル『精神の現象学 上巻』所収. 岩波書店. 443–580.

Kant, Immanuel. 2009. *Kritik der Urteilskraft*. Hg. Heiner F. Klemme. Hamburg: Felix Meiner Verlag.

[50] ヘーゲルの自然哲学はヘーゲル哲学にとってだけではなく、現代の心の哲学や科学哲学にとっても重要である。たとえば、Quante（2011）と Bowman（2013）は「観察する理性」の、本稿が中心的に扱ったのとは別の箇所をテキストに内在的に解釈したうえで現代哲学につなげた議論を展開している。

Kanz, Kai Torsten. 2021. Kielmeyer's Fame and Fate. In *Kielmeyer and the Organic World: Texts and Interpretations*, ed. Lydia Azadpour and Daniel Whistler. London: Bloomsbury Academic. 11–26.

Kielmeyer, Karl Friedrich von. 1793. *Ueber die Verhältniße der organischen Kräfte unter einander in der Reihe der verschiedenen Organisationen, die Gesetze und Folgen dieser Verhältniße*, Stuttgart.

Lenoir, Timothy. 1982. *The Strategy of Life: Teleology and Mechanics in Nineteenth Century German Biology*, Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

松山壽一. 1997. 『ドイツ自然哲学と近代科学』. 増補改訂版. 北樹出版.

Quante, Michael. 2011. Kritik der beobachtenden Vernunft. In *Die Wirklichkeit des Geistes: Studien zu Hegel*. Berlin: Suhrkamp Verlag. 91–115.

Scholz, Maximilian. 2020. External Teleology and Functionalism: Hegel, Life Science and the Organism-Environment Relation. In "Hegel and the Philosophy of Biology." Special Issue, *Hegel Bulletin* 41, no. 3 （December）: 371–88.

Siep, Ludwig. 2000. *Der Weg der »Phänomenologie des Geistes«: Ein einführender Kommentar zu Hegels »Differenzschrift« und zur »Phänomenologie des Geistes«*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.

Stern, Robert. 2002. *Routledge Philosophy Guidebook to Hegel and the Phenomenology of Spirit*, London: Routledge.

渡辺祐邦. 1969. 「ヘーゲルにおける弁証法と生物学の諸問題（下）—『精神現象学』の「自然の観察」に対する解釈の試み—」. 『北見工業大学研究報告』第 2 巻第 4 号: 617–58.

Hegel on Vital Forces in "Observing Reason" of *Phenomenology of Spirit*

Shu YABATA

In "Observing Reason" of *Phenomenology of Spirit*, Hegel criticizes his contemporary philosophy of nature: ecology, teleology, vital forces, morphology, and history of nature. This paper focuses on animal organism's vital forces (sensibility, irritability, and reproduction), and analyzes Hegel's criticism of the law of vital forces. This law was constructed by Kielmeyer, in his 1793 speech, *On the Relations between Organic Forces in the Series of Different Organisations, and on the Laws and Consequences of these Relations*, and Schelling, who was influenced by Kielmeyer. In "Observing Reason," Hegel reconstructs Kielmeyer and Schelling's law and criticizes their law because it lacks "the logical nature." From this criticism, it can be inferred that Hegel's theory of vital forces is based on the logical nature. However, Hegel does not clearly define what the logical nature is. Therefore, the question this paper addresses is formulated as follows: what is the theory of vital forces based on the logical nature? This question is answered through an analysis of Hegel's criticism of their law. By answering this question, we can understand Hegel's theory of vital forces in "Observing Reason." Through answering this question, this paper also reveals why, from Hegel's perspective, Kielmeyer and Schelling's law is wrong. According to Hegel, their law falls into the anatomical way, into the form of "being" and "endurance" to comprehend living beings as cadavers. This point is well known to Hegel scholars, but the reasoning behind it has not been studied hitherto. This paper reveals this reasoning. Moreover, this paper elucidates the significance of teleology for Hegel's theory of vital forces. Unlike Kant, Hegel thinks telos does exist in animal organisms. However, the reason telos must exist for the structure of vital forces has not been explained. This paper interprets telos as the ground of the structure of vital forces.